



特集

色覚の多様性を理解して より多くの人に色の情報を伝える —— NPO法人 北海道カラーユニバーサルデザイン機構

Book Stories 本づくりのさきにあること——。

..... 北海道で生きる150人の人生をありのままの言葉で記録した『北海道の生活史』を発刊
『北海道の生活史』プロジェクト事務局 大塚 環さん

ほっかいどうの本 『ニャンと楽しい北海道歳時記』 北海道新聞社
『牧場づくりの夢に賭けて 出田牧場60年ものがたり』 デーリイマン社
『つながり力の教科書 地方発 人脈が広がり、売上が伸びるコミュニティ経営術』 共同文化社

特集

色覚の多様性を理解して より多くの人に 色の情報を伝える

—— NPO法人 北海道カラーユニバーサル
デザイン機構

正常色覚の方(C型)が
見えている色合い

赤を感じる機能が
欠けている方(P型)が
見えている色合い



札幌・ススキノのネオンをC型(左)とP型強度(右)との見え方をシミュレーションした画像

カラーユニバーサルデザインは、色覚の多様性に対応した社会を目指す取り組みです。

生まれつき赤や緑などが見分けづらい、いわゆる色弱の人は、国内に約300万人いると言われています。

カラーの地図や鉄道の路線図が読みにくい、焼肉時に肉が焼けているか分からないといった悩みを抱えている方がいます。

治療法もない、この色覚の特性を理解し、できるだけ多くの人に色の違いを伝えるため、

20年以上にわたり、さまざまな活動に取り組む

NPO法人北海道カラーユニバーサルデザイン機構(北海道クドCUDO)の谷越律夫理事長に話を聞きました。

(文・写真/片山健一 取材日2026年2月17日 写真提供:北海道CUDO)

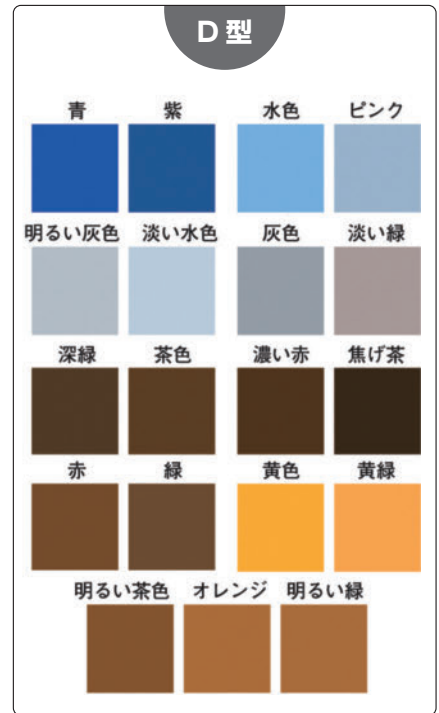
正常色覚の方が
見ている色



赤を感じる機能が
欠けている方が見ている色



緑を感じる機能が
欠けている方が見ている色



色覚の
多様性とは

北海道CUDO^{クド}などでは、色弱や色盲と呼ばれていた色覚を、多様な見え方の特性に応じて「P型」「D型」「T型」「A型」に区分し、いわゆる正常色覚を「C型」と呼んでいます。国内に約300万人いるC型以外の少数派色覚者のうち、大半は赤と緑などの見え方が異なるP型とD型が占め、青系の色を感じにくいT型、1色にしか見えないA型は数万人に1人の割合と言われています。P型とD型は、さらに強度と弱度に分けて、これらの少数派色覚に共通する特性を踏まえた配慮の在り方を確立し、C型も含めできるだけの多くの人々が見分けやすい配色などを提唱しています。

社会に
知らせなければ

谷越理事長が少数派色覚（以下、色弱と表記します）の見え方に関心を持ち始めたのは、25年ほど前です。経営している印刷会社でオペレーターを募集した時、数人の応募者の中から、採用しようと思った一人の青年から「色弱ですが、大丈夫でしょうか」と打ち明けられました。



北海道CUDOの谷越理事長

色弱ついて知識のなかった谷越さんは、その特性について聞き、「印刷業界は、微妙な色の違いで商売をしているので、会社に入ったら相当苦労するだろうけど、覚悟はあるか」と尋ねました。すると、彼は「そうですよね」と寂しそうに笑いながら、「社長すいません、辞退します」と去っていきました。

この青年の話から、格好の良いデザインだと思って使っていた黒地に赤い文字の表現では、伝わらない人がいることを知った谷越さんは、大型書店で眼科の専門書を手に取りました。読んでみると、色弱のことは1、2ページしか載っておらず、専門用語ばかりで分かりづらい内容でした。インターネット上にも情報がほとんどなく、色弱に詳しい人を探



色違いのケーブルも色弱の人には同じように見えている場合がある

し、東京大学などの研究者たちに教
えを請いました。

その結果、日本人男性の20人に1
人が色弱と聞かされ、にわかには信
じられなかった谷越さんは「そんな
いるなら、多くの人が知っているは
ず」と、友人や知人に色弱の話をし
てみると、皆、口をそろえて「そん
なにいるわけがない」と言います。
谷越さんは「これは社会に知られて
いない、重大な問題だ」と確信し、
「印刷を生業とする自分自身の社会
的責任として取り組まなければ」
と、色弱者にも伝わるカラーユニ
バーサルデザインを普及させること
を決意しました。

北海道CUDOに 集まる人々

色弱者の実態を広く伝え、カラー
ユニバーサルデザインを普及させよ
うと、谷越さんが動き始めると、
「色弱であることに不便を感じない
世の中にする」という志に賛同する
人たちが次々と現れました。グラ
フィックデザイナーや建築家、色弱
の子どもがいる母親など、仕事や子
育てなどで忙しいなか、手弁当の活
動に協力してくれました。

カラーユニバーサルデザインを広
めるため、「新聞に連載できるとい
いのね」などと仲間内で話してい

た矢先、北海道新聞の記者から「生
活面の連載が1本空くので、書いて
みませんか」と声が掛かりました。
NPO法人の設立準備段階から連載
用の原稿を書きため、2006年3
月に北海道CUDOが発足した翌月
から、「色弱者の本音」というタイ
トルで毎週1回の新聞連載が始ま
り、約7カ月、26回にわたり掲載し
ました。

その反響は大きく、入会や取材の
申し込みが続々と舞い込んでしま
した。「おかげで活動も順調なスタ
ートを切ることができました。次から
次へと人の縁がつながり、思いも実
現する、そんな不思議な体験でし
た」と谷越さんは振り返ります。

バリアフリー法が施行された
2006年に発足したことも追い風
となり、新聞やテレビ、ラジオなど
のメディアに盛んに取り上げられ、
教育関係者や産業団体のセミナー講
師などと呼ばれるたびに、北海道
CUDOに入会して勉強したいとい
う会員が急速に増えていきました。

活動は、「会員の集い」を年3回ほ
ど開き、テーマを決めて勉強会を開
いたり、カラーユニバーサルデザイン
に配慮した施設の見学に行ったり、
パーティーを開いて会員間の親睦を
深めているほか、会報誌「こころの
色通信」を年2回発行しています。

北海道CUDOの活動が脚光を浴
びるようになってからも、谷越さんは
「カラーユニバーサルデザインを商
売につなげようと考えたことは一度
もありません。本気で社会を変えて
いこうという一心でした」と言い切
ります。無報酬で、休日を返上して
イベントを開くなど、谷越さんらが
真剣に取り組む姿勢を見て、次第に
同業の企業にも協賛の輪が広がって
いきました。

色弱の色の世界を 知らせる

北海道CUDOは、発足当初から
「こころの色展」というイベントを
盛んに開催してきました。札幌市内
のほか、旭川、帯広、室蘭、函館な
ど、年に3、4カ所のペースで展示



全道各地で開いた「こころの色展」

するパネルを持参して全道を回りました。

「こころの色展」は、同じ絵をC型の見え方と、P型やD型の見え方を色違いで表現したパネルを見比べられるように展示し、色弱の人にはこのように見えていること、そして色弱の人たちが大勢いることを知らせる内容でした。

「こころの色展」の会場を訪れた小学校低学年の男の子が、トマトやキュウリ、ジャガイモなどの野菜を描いた2枚のパネルを見比べて「ママ、この絵の、どこが違うの」と言いました。母親はその時初めて、トマトが赤く見えていない我が子の色の世界を知り、号泣してしまつたそうです。谷越さんが「お母さん、見ない方が良かったかい？」と尋ねる



CUD EXPO2008の様子

と、「とんでもない。やっと息子のことを理解してあげられました」と母親に感謝されました。

日本人男性の20人に1人が色弱なのに対し、女性は500人に1人の割合しかいません。男性の色弱は100%母親からの遺伝によるものです。また女性の10人に1人は自身の子どもが色弱になる因子を持つっており、その方から生まれてくる男の子は2分の1の確率で色弱になります。

「変わった色で絵を描いた」「箸の色を間違える」「靴下を互い違いにはいてしまう」といったことで、子どもの色弱に気付き、遺伝的な事実を知ると「私のせいで色弱になった」とショックを受けてしまうのが母親です。その後も「進学する時はどうしたらいい」「就職先の制限はあるのか」など、いろいろな悩みが出てきます。そうした心配ごとをケアしていくことも北海道CUDOの役割となっています。

「こころの色展」を通じて、色弱の人が一定数存在し、配慮した色使いが必要なことを訴えていると、「配慮とは具体的にどうすればいいのか」という質問が寄せられるようになりました。そこで2007年からは「カラーユニバーサルエキスポート」という、実際に色弱者にも配慮したカラーチョークやバス路線図な

どを一堂に集めた展示会やカラーユニバーサルデザイン相談会などを定期的に開催しています。

2011年以降は、2年に1回のペースで、過去に実施したイベントを統合し、カラーユニバーサルデザイン製品の展示、色弱体験、トークショーなどで構成する「CUDO! (シーユードゥー!)」というイベントを3日間にわたり開催しています。

CUDO 認証で 伝わる社会に

北海道CUDOの活動のもう一つの柱が、行政などが発行する印刷物、企業が製造する商品、施設の案内表示板などに「カラーユニバーサルデザインマーク」を交付するCUDO認証事業です。

「CUDO」を冠するNPO法人は、東京都と北海道の2団体のみです。両者は協力関係にあり、東京のCUDOが半年ほど早く設立されましたが、北海道では法人化の前から、谷越さんが先駆的に取り組んできた歴史や社会環境の違いもあるため、「カラーユニバーサルデザインを普及させるためにも、北海道には独立した組織が必要だとこだわりました」(谷越さん)。

CUDOが認証して使用許諾と合

格証を交付するマークは、身近な所で見られます。子どもたちが使う教科書は、カラー化に伴い、2010年ごろからカラーユニバーサルデザインに配慮したものが定着しています。札幌市の公共施設でも、改善が進んでいます。地下鉄の車内案内の液晶表示は、新型車両の更新に合わせて



札幌市営地下鉄車両の案内表示にCUDOマークが掲示されています



て順次表示が切り替わっています。
2025年に建て替えた中央区役所の案内サインは、計画段階から北海道CUDOが関わっています。

札幌以外の地域でも、旭川市の旭山動物園では2007年3月から案内看板のカラーユニバーサルデザイン化に取り組んでいるほか、函館市は色覚に配慮した公式ウェブサイトを、2024年1月にリニューアルしました。

色弱者自らが検証員として 検証作業を担当

カラーユニバーサルデザイン認証に向けて検証作業を担うのは検証員と呼ばれる、色弱の各タイプの強度の方々です。色弱者は色の明るさや



札幌市の路面電車運行情報モニターを検証する様子

鮮やかさの差に敏感で、少し色を変えるだけで見え方が全く違ってくるそうです。

検証員は、設置する場所や明るさなど実際に使用する条件の下で検証作業を行います。例えば路面電車の停留所に設置した運行情報モニターの場合、晴れの日と曇りの日、日中、日没後など、さまざまな環境下で検証しています。審査項目ごとに1から6までの段階で評価し、4〜6が合格、1〜3が不合格で、1〜3が1項目でもあると認証されません。

谷越さんからC型の人たちも、検証員と共に検証の現場に立ち会います。色弱者には区別がつかない、オレンジと茶といった組み合わせの色を使っている場合、検証員だけでは見過ごす可能性があるためです。

また、色弱者は見やすくても、C型には明度や彩度に違和感を覚える場合もあります。「色弱の特徴を踏まえてつ、C型にも違和感のないよう色を調整し、ちょうど良い着地点を見つけることが一番難しい」（谷越さん）と言います。C型の人と検証員とが二人三脚で審査・改善していきます。

また、色の違いだけに頼るのではなく、強調する部分を太字にしたり、グラフも色分けだけでなく、斜線やドット、格子などのハッチング模様を入れて工夫を施すこともあ

り、改善する前と後では違うデザインになる場合もあります。

異なる色覚タイプの検証員が検証し、1回で合格する場合もあれば、色やデザインを変えて、何回もチェックする場合もあります。認証には手間と時間がかかります。このため認証費用も安くはなく、1件につき数十万円になる場合もあります。

命に関わる情報こそ

カラーユニバーサルデザインで

色弱者に伝わらないと困る情報の代表格は、命に関わる災害時の情報です。

2011年3月の東日本大震災では、大津波警報、津波警報、津波注意報という3つの津波情報が発表されましたが、放送局によって警報の範囲を示す色がバラバラでした。

その中には、色弱者が区別しにくい色の組み合わせもあったため、谷越さんは、色弱の知り合いに連絡して、全局のテレビ画面をチェックしました。その結果を東京のCUDOと共有し、気象庁に改善を申し入れました。

地方自治体が発行する洪水や津波、土砂災害などの想定範囲を示すハザードマップ（災害予測図）も重要です。国土交通省の指示もあり、



カラーユニバーサルデザインを取り入れて、見やすくなった信号機の押しボタン（左）と以前の押しボタン（右）



カラーユニバーサルデザインに配慮して湧別町が作成した湧別川洪水ハザードマップ

徐々にカラーユニバーサルデザインが採用されるようになってきました。

北海道警察では、全国に先駆けて約20年前から押しボタン式信号の「ボタンをおしてください」「おまちください」という表示の色を、機器の更新のタイミングで順次切り替えています。以前の表示は黒地に赤文字だったものが、黒地に白文字のLED（発光ダイオード）にしたことで劇的に見やすくなりました。全国で普及した結果、メーカーも黒地に赤文字の製造を中止しています。消火栓の赤や、高速道路の看板の青や緑などに使われる日本産業規格（JIS）の「安全色（赤、黄赤、黄、緑、青、赤紫の6色）」も、2019年4月からカラーユニバーサルデザインを採り入れ、微妙に色が調整されています。

できる配慮を 社会全体で着実に

カラーユニバーサルデザインの原点は、強度の色弱の日本人研究者が学会に参加した際、レーザーポインターの赤い光で示された所が分からないことから始まったそうです。そこで、カラーユニバーサルデザインに配慮して開発したのが緑発光のレーザーポインターでした。



札幌市の広報に関する色のガイドラインセミナーには毎年多数の受講がある

行政が発行する広報誌などのカラーユニバーサルデザインも進んできています。札幌市では、認証を得なくても簡易的に色弱に対応した配色やデザインを利用できるように、北海道CUDOと連携して2016年に「広報に関する色のガイドライン」を策定し、印刷物、ウェブサイト、地図、プレゼン資料などに適用しています。

2023年からは、札幌市が発注する印刷物や施設サインなどの仕様書には、このガイドラインに基づいて作成することが明記されるようになり、多くの受注業者が色に配慮するようになりました。札幌市広報課が主催する入札参加資格者向けのセミナーでは、このガイドラインにつ

いて解説しており、毎年多くの関係者が受講しています。

また、パソコンやスマホでカラーの報告書やウェブサイトの制作を手軽にできるようになったことで、印刷物などを扱う技術者だけでなく、より多くの人が色使いに配慮しなければならぬ場面が増えてきました。

社会を変えるには 時間がかかる

北海道CUDOが活動を始めた21年前とは違い、今では色弱のこともインターネットで調べられ、色弱者の見え方をシミュレーションできるパソコンソフトやスマホアプリもあるなど、ある程度の悩みは個人で解決できる時代になりました。

しかし、色弱者に対する偏見や誤解がいまだにあり、動画サイトやSNS上には間違った情報や誇張した表現が見られるそうです。これらが差別や不安を助長し、「お前、色が分からないのか」「これ何色に見える」などからかわれたりするなど、「色弱の人が気軽に打ち明けられない状況は、活動を始めた頃とさほど変わっていない」と谷越さんは語り、「正しい情報を発信している北海道CUDOのサイトをもっと周知しなければ」と考えています。



札幌駅前通地下歩行空間で開いた「CUDO! 2025」

カラーユニバーサルデザインの普及に寄与してきた谷越さんですが、「いまだに多くの人が色弱者に会ったことがないと思うのは、自ら色弱だと言えない人が多いからです。色弱であることをためらいなく言える世の中を目指してきましたが、社会を変えるというのは本当に時間がかかります」と語ってくれました。

お問い合わせ先

特定非営利活動法人

北海道カラーユニバーサルデザイン機構

〒007-0810

札幌市東区東苗穂10条3丁目18-1

☎011-6000-2067

✉電子メール info@color.or.jp

HPアドレス www.color.or.jp

ブック・ストーリー・リーズ
本づくりの
さき
にあること



北海道で生きる150人の人生を ありのままの言葉で記録した 『北海道の生活史』を発刊

北海道新聞社 事業局 出版センター長

大塚 環さん

誰が何について語っているのか、読み進めなければ分からない——。そんな150編の生活史をつづった大冊『北海道の生活史』が、2026年1月に発刊されました。北海道にゆかりのある人物の語りにひたすら耳を傾け、約1万字の文章にまとめた150人の聞き手の作品を一冊に収めています。『北海道の生活史』プロジェクトの事務局を担った北海道新聞社事業局出版センター長の大塚環さんに、プロジェクトの過程、この本の魅力などを聞きました。

(文・写真/片山健一 取材日2026年3月4日)

『北海道の生活史』プロジェクト事務局が 始動

「『北海道の生活史』発刊の経緯を、
教えてください。」

既に刊行されていた東京、大阪、沖縄の各『生活史』に感銘を受けたというコープさっぽろさんから、「創立60周年記念事業の一つとして北海道版を作れないだろうか」という相談が出版センターにありました。これらの『生活史』を編集した京都大学大学院教授の岸政彦先生に、弊社で出版を手がけることができなかと相談し、ご了解いただいたのは2024年6月のことです。

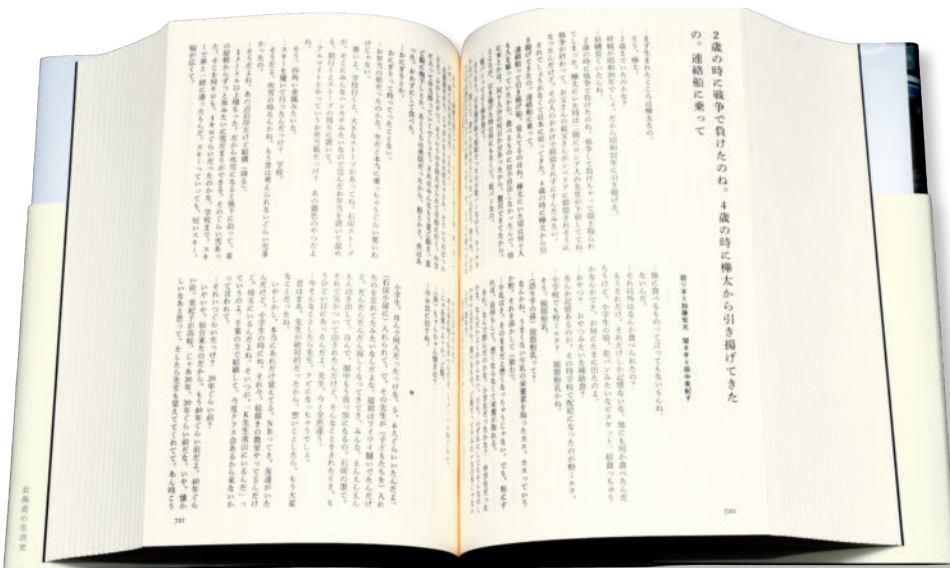
私共もこの『生活史』のことは知っていて、「すごい本があるな」とは思っていました。が、まさか自分たちが携わることになるとは——というのが正直な思いでした。

岸先生と道新出版センターで『北海道の生活史』プロジェクト事務局を立ち上げ、岸先生には監修という立場で、取材時の心構えや原稿の書き方などのレクチャー、相談会でのアドバイスなどをお願いしました。

聞き手の募集や聞き手への連絡、原稿の回収や校正などの実務は、弊社で行いました。

レイアウトなどは東京や大阪の

『生活史』を踏襲することになりました。岸先生の計らいもあり、これらを出版した筑摩書房さんからもいろいろ教えていただくことができました。印刷・製本も、これまでの『生活史』を手掛けた本州の印刷会社に依頼しました。昨年11月には校了になりましたが、印刷と輸送に時間がかかり、納品・発行は今年1月になりました。



『北海道の生活史』について

北海道内のさまざまな環境で暮らしてきた150人の人生の記憶を、150人の聞き手が記録したインタビュー集の『北海道の生活史』が2026年1月21日、北海道新聞社から刊行されました。

社会学者の岸政彦・京都大学大学院教授がこれまで編集してきた『東京の生活史』『大阪の生活史』（共に筑摩書房刊）、『沖縄の生活史』（みすず書房刊）のスタイルを取り入れ、同氏が監修し、北海道新聞社が編集を担当、生活協同組合コープさっぽろが創立60周年記念事業として協賛し、実現しました。

取材して原稿を書く「聞き手」150人は公募で選ばれ、各自が「語り手」を選んでその生活史を聞き取り、会話調で約1万字の原稿にまとめました。語り手は多様で、中にはシベリア抑留経験のある男性、看護師からスナック経営に転じた女性、ホームレス経験者などもあります。取材、執筆、編集などに約1年半をかけて完成しました。

1ページ2段組みのレイアウトに、イラストや写真などが一つも入らない構成で、A5判の1,280ページ、厚さは約6センチ、重さ1.5キログラムに上ります。価格：4,950円（税込） ISBN：978-4-86721-182-3

【本書お問い合わせ先】

北海道新聞社出版センター

電話 011-210-5744（平日：午前9時30分～午後5時30分）

URL <https://kk.hokkaido-np.co.jp/book/special/hokkaido-project/>

「北海道の生活史」
特設サイト



150人の生活史が厚さ約6センチの本になりました



できるだけ多くの語りを書きたい——聞き手150人を選出したか。

——聞き手にはどんな人たちが集まりましたか。

当初の募集は100人でしたが、276人の応募がありました。選考会で応募動機などを参考にある程度絞り込みましたが、これだけ多くの応募があったことに加え、できるだけ多く載せたいという思いがあり、東京・大阪の生活史と同じ150人に増やすことにしました。最終的には抽選で決めました。

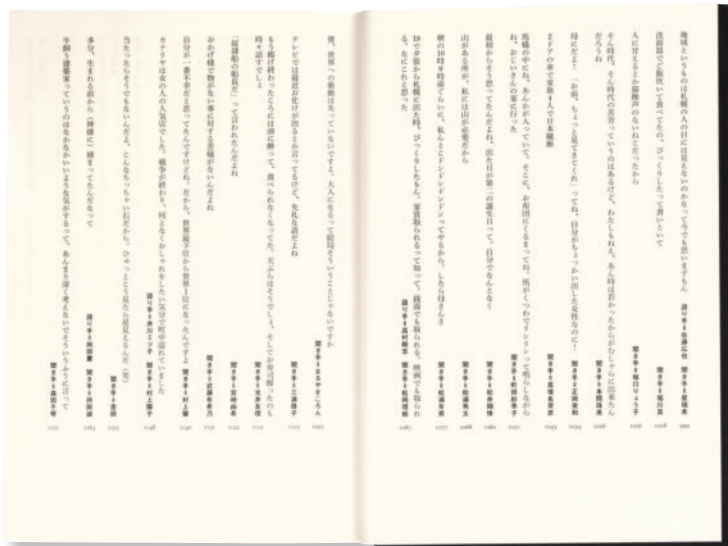
聞き手には、新聞を見て応募してくれた一般の人はもちろん、ライターや大学の先生などもいました。社会学者の石岡丈昇さんや作家の能町みね子さん、詩人の文月悠光さんなどからも応募をいただき、応募者リストを確認した時に、驚いたと同時に大変うれしく思いました。これまでの『生活史』では岸先生も聞き手として参加されていて、北海道でもお願いしました。聞き手のうち、3割弱は道外在住の方です。

表現は聞き手の意向に沿うように

——具体的な取材方法や原稿の書き方は。

岸先生が『生活史』で大切にしていることのひとつが、「語り口を残す」ことです。

インタビューは必ず録音し、どのようにその内容を話したか、言った通りに書き起こしてもらいました。約2時間の会話を単純に文字に起こすと3万〜4万字くらいです。中には聞き取りに2日間かけて10万字になった人もいました。その一次原稿



聞き手が本文から抜き出してつけたタイトルが並ぶ目次

を、一旦、事務局に送ってもらい、内容を確認しました。

次にその一次原稿を1万字の原稿にしてもらうのですが、岸先生のアドバイスは「全体からかいつまんでいくと、内容が薄くなる。唐突に始まり、唐突に終わってもいいので、断片として切り出す」ということでした。

どこを切り出すかは聞き手に全て委ね、こちらから「この部分を書いて」という指示はしませんでした。聞き手が一番苦労していたのが、この、どこを残すかという作業だったと思います。1万字の原稿の締め切りは、2025年4月末でしたが、間に合わない人もいました。

原稿は聞き手の作品です。事務局は、校正しつつも、表現については聞き手の意向に沿うように努めました。こちらが修正したいと考えた場合は、こういう理由でこうした方がいいのではと提案しますが、「このままで」と言われれば、基本的に残しています。

残念ながら途中で辞退される人もいました。原稿は、必ず語り手にも確認してもらうようにしましたが、聞き手と語り手がOKでも家族が反対し、原稿はほぼ出来上がっていたのに辞退となったケースもありました。大変な作業だったと思います。最

後まで諦めずに書き上げて、出版するまで一緒に走りきってくれた聞き手の皆さんには感謝の気持ちしかありません。

ファクトチェックと修正

――編集する上でこだわった部分は。

凡例に「語りをそのまま掲載しているので、事実関係が正確でない場合があります」という注釈を入れてはいますが、ファクトチェックにはこだわり、厳密に行いました。

過去の『生活史』で、語り手が「東京で観た○○という映画」と言ったが、実際にはその時期に上映されていなかったということがあったそうです。岸先生は、その人の中で「東京」と「○○という映画」が結

びついて記憶されていることに意味がある。時期が違うことはあまり重要ではないので、あえて修正しなかったとおっしゃっていました。

年代や年号、地名、固有名詞などの勘違いと思われる記述についてはこちらからお知らせしました。基本的に直すかどうかは聞き手に委ねましたが、本人が意図していなくても差別や誹謗中傷と取れる表現については直接電話で話すなどしてこちらの考えを伝え、対応してもらいました。

素の言葉で歴史を語る

――本が完成して感じたことは。

文字量やページ数から、このくらいの厚さの本になるだろうと分かっていたのですが、実際に出来上がった本を手にして、まさに150人の人生の積み重なりであるかのような重みを感じ、感慨深かったです。

素の語り口を文章にするのは非常に難しい作業でしたが、聞き手の頑張りもあって、わざとらしくない独特のリズムがある語りとして紹介できたと感じています。語り手は、大学生から90代までいます。話されている出来事は『生活史』という形をとった歴史書にもなったといえます。表紙のカバーには、岸先生が撮影した写真を使わせていただきました



本を手にする大見英明コープさっぽろ理事長(右)と岸政彦教授(左) (北海道新聞社提供)

た。札幌の街中を人が行き交う何気ない風景ですが、『生活史』というものを端的に表していて、かつ、とても美しい本になったと思っています。

完走した「同志」が一堂に

――2月1日に開かれた刊行記念レセプションの様子は。

レセプションは、和やかで楽しい会になりました。最初の研修会が開かれた2024年11月から発行の2026年1月まで、それぞれ顔を合わせることはなくても、一緒に頑張り続けてきた、いわば同志です。「あなたがこの作品の聞き手だったんですね」といった交流も生まれていました。

当日は大雪でしたが約90人が集まってくれました。会場は2025年夏にリニューアルした北海道庁赤

れんが庁舎で、北海道の歴史が詰まった場所で『生活史』のレセプションを開催できたことに何かの縁を感じます。

同じ会場で5日間、150の語りタイトルをあしらった段ボールによる造形物で『北海道の生活史』の世界観を表現した展示会も行いました。さっぽろ雪まつりの期間でしたので赤れんが庁舎には観光客が多く、ついだったかもしれないが展示会場もたくさんの人に見てもらうことができました。書店とは違った形で『北海道の生活史』を知ってもらえたのではないかと思います。



聞き手関係者が集まったレセプションでの記念撮影 (北海道新聞社提供)



道庁赤れんが庁舎で開かれた展示会 (北海道新聞社提供)

ほっかいどうの本

このコーナーは北海道の出版社から発行された本を社員が読み紹介しております。お近くの書店にない場合は発行先へお問い合わせください。特記以外は税込価格です。

ニヤンと楽しい北海道歳時記

978-4-86721-178-6

さとうもえ 作／松本麻希 絵
四六判 160頁 1430円
北海道新聞社 発行 0111・210・5744



本書は北海道の季節の移り変わりを感じられる歳時記で、道外に住んでいた経験をもつ「いくらネコ」の視点で書かれています。可愛らしいたくさん仲間たちの挿絵とともに、北海道ならではの自然や暮らしが描かれており、北海道の良さを改めて発見させてくれます。

北海道に住んでいる方であれば、「そうそう、あるある」と共感できる風景や出来事が詰まっています。季節ごとの草花や食べ物についての解説もあり、楽しく知ることが出来ます。さらに、間違い探しのページが季節ごとにあるので、子どもから大人まで世代を問わず楽しめるのも魅力です。大人だからこそ気が付く味わい深さもあり、読むほどに北海道の季節や文化への理解が深まります。

また、アイヌ民族の歳時記も掲載されており、自然とともに生きてきたアイヌ民族の文化について知ることができる点も興味深いところです。北海道の豊かな自然と文化をこの歳時記で感じられてはいかがでしょうか。

(クリエイション部 山田琉衣奈)

牧場づくりの夢に賭けて

978-4-86463-107-8

出田 基子 著
四六判 214頁 2530円
デーリイマン社 発行 0111・209・1003



本書のカバー写真では、青い空と悠々たる山々を背景にして、雪原に何頭もの牛たちが寝そべています。筆者である出田基子さんと、夫の出田義國さんが北海道十勝管内清水町で営む牧場の風景です。

寒さの厳しい北海道という土地柄にもかかわらず牛舎がない、完全放牧酪農を主体とした経営は全国各地から注目を集め、筆者の出田さんは雑誌や新聞など各媒体で執筆活動を行ってきました。本書はそれらをまとめたもので、出田牧場のほじまりから、これまでがつぶさに描かれています。

執筆当時の酪農情勢や牧場のエピソードが四季折々の風景とともに綴られており、牛と日々対峙して導かれた理論的な実践や、人の命の根幹を担う農業が軽視される社会への警鐘、そして日本の酪農と酪農家、牛たちの牛らしい生をいかに守るかという信念がうかがえます。

わたしたちが何気なく消費している牛乳を作り出す人々や牛たちのことを、一消費者として知るためにも意義深い一冊です。

(東京営業部 真野友華)

つながり力の教科書

978-4-87739-435-6

和久井 海十 著
A5判 192頁 1870円
共同文化社 発行 0111・251・8078



主に経営者や個人事業主に向けた、売上拡大と事業成功のためのビジネス書です。著者はIT企業や大手商社でトップセールスマンとして活躍し、現在は札幌在住で、コンサルタントとして多くの事業者を支援しています。著者の実体験に基づく営業ノウハウを学ぶことができます。

本書では、営業は科学であるとして、セオリーに基づくシナリオを設計し、商談・対話のステップを段階的に進めることで、誰でも成果を伸ばせると示されています。

特に重要なのが書名にもある「つながり力」。先に相手に価値(無料のツールなど)を与え、対話を重ねることで信頼を得て、価値の交換が続く関係を築くことが事業成功の鍵であるとしています。

エステ経営・ヨガ講師・サプリ販売という3名の経営者の立場から、それぞれが商談モデルを構築していく物語形式で書かれ、各章ごとに学びの要点が記載されているので理解が深まりやすいのも特徴です。売り込まなくても選ばれる人を目指す、営業活動を設計する力を育むことができる実践書となっています。(東京営業部 阿部成紘)

新刊情報

書名の下の数値は日本図書コード(J.S.B.N)及び雑誌コード。特記以外は税込価格。
お近くの書店にない場合は発行先へお問い合わせください。

北の文学 2025

北海道新聞文学賞・短歌賞・俳句賞

(電子書籍、オンデマンドのみ)

北海道新聞社 編

A5判 126頁 1430円

北海道の生活史

978-4-86721-182-3

岸 政彦 監修／北海道新聞社 編
A5判 1280頁 4950円

お隣は外国人2 仕事・生活・ことば

978-4-86721-185-4

湯山 英子・宮入 隆・
平田 未季 編著
A5判 208頁 1760円

新装版 海峡の鉄路 青函連絡船

978-4-86721-172-4

原田 伸一 著
B5判 232頁 2640円

増補版 留萌線の記憶

978-4-86721-184-7

番匠 克久 著
B5判 112頁 1760円

しまえながなるほどこん

978-4-86721-186-1

やまもとこういち 著
A5変型判 128頁 1980円

私の使命 中途失明を越えて

978-4-86721-187-8

安達 朗子 著
四六判 206頁 1980円

北海道日本ハムファイターズ オフィシャルガイドブック2026

978-4-86721-188-5

北海道新聞社 編
A4判 112頁 1650円

マリモ大全

978-4-86721-189-2

若菜 勇 著
A5変型判 416頁 3520円

道新プラス 北海道の病院 2026

16747-03

北海道新聞社 編
B5判 260頁 990円

北海道新聞社
〒060-0811 札幌市中央区大通東4-1
011-210-5744

樺太郷土文化誌

検文叢書8

地名・史跡・博物館

鈴木 仁 著
A5判 206頁 8800円

樺太からの引揚者と戦後北海道

978-4-8329-6909-4

木村 由美 著
A5判 254頁 8800円

ブックレット・ポーターズ12 ポーターの城と歴史

城を巡るポーターリズム

高田 喜博 著

B5判 86頁 1320円

宗教学15講

これだけは知っておきたい宗教と宗教学の基本

978-4-8329-6910-0

宮嶋 俊一 著
A5判 230頁 3080円

北海道大学出版会

〒060-0800 札幌市北区北9条西8丁目

011-747-2308

松浦武四郎の日高地方探査記 上

978-4-8329-2601-4

加藤 公夫 著
四六判 276頁 1870円

松浦武四郎の日高地方探査記 下

978-4-8329-2602-1

加藤 公夫 著
四六判 249頁 1870円

北海道出版企画センター

〒060-0818 札幌市北区北18条西6丁目2-47

011-737-1755

ゲノムと社会

いつくる生命、ゆれる価値観

JSTRISTEEX

「ゲノム倫理」研究会 編著

A5判 336頁 2200円

つながり力の教科書

地方発人脈が広がり、売上が伸びる「コミュニティ経営術

和久井 海十 著

A5判 192頁 1870円

父・田中了が遺したものの

戦争を越えて生き抜いたある教師の記録

石戸谷 史 著

A5変型判 212頁 1980円

江別の絵はがきものがたり

図柄が語る江別のあゆみ

978-4-8739-436-3

佐々木 孝一 著
A5判 104頁 1650円

爪印@空撮日記 2025

978-4-8739-439-4

青木 曲直 著
100頁×74頁 236頁 5000円

研究開発と政策実装

科学技術イノベーション政策のための科学の実践

森田 朗・山縣 然太郎・

黒河 昭雄 編著

JST社会技術研究開発センター

A5判 408頁 4950円

共同文化社

〒060-0833 札幌市中央区北3条東5丁目

011-251-8078

紙のことば

早春のシリバ山から望む

積丹半島

佐々木 美也子

木版画 29.5センチ×42センチ

シリバ山(尻場山2995.8m)は、海に突き出たシリバ岬の断崖が特徴の山で、シリバ岬は北海道余市郡余市町にありニセコ積丹小樽海岸国定公園の一部をなしています。約630万年前の海底火山由来の地形で、春はカタクリの花が楽しめる場所です。山頂までは約1〜1.5時間で登れるハイキングコースとされていますが、登山口から始まる急な登りは低山とは思えないところ。そのかわりご褒美かのように、頂上からは積丹ブルーの海や雪化粧した積丹岳の絶景を望むことができます。

GEM木版画会 会員 札幌市在住



※季刊アイワードのバックナンバーを
弊社ホームページよりご覧いただけます。

URL <https://iword.co.jp>